様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２４２０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３１０３２

研究課題名（和文）近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究

研究課題名（英文）The histrical study of the formation of readers conciousness of magazines and the affected of domestic "SHOUNEN" in modern era

研究代表者
田中　卓也（takuya, TANAKA）

共栄大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０４３５０４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,400,000円、（間接経費）　720,000円

研究成果の概要（和文）：第一点として、少年雑誌は、児童雑誌の誕生のなかで登場し、「児童」とは異なり、「少年」という枠組みを形成した。このときの「少年」はおよそ、小学校低学年から高等学校生ごろまでをさすものであることもわかってきた。第二点目は、少年雑誌における誌面上の想像上の「読者共同体」が存在していた。彼らは学校教育を受け、読み書きを基礎に学習経験を積むことになり、家計事情が良好で、成績優秀であれば、中学校、高等学校への進学の道が広がった。第三点は、読者共同体の特徴の変化があらわれた。戦前期までの少年雑誌に見られるような、思想に裏打ちされたものではなく、誰もが、使用できる略語で表現する等、読者等をまとめようとした。

研究成果の概要（英文）：(1) These characters and creatures of infants magazines readers their style and consciousness have theirs roots in "nationalism" "Careerism" and "a good (1)the boys magazines were born to the birth of chirdren for magazines. It was formation of the framework were said to "SHOUNEN".These time,the words of "SHOUNEN"were also meaning of the ages classes of theirs readers were almost from infants to students. (2) the unite of "Readers communities" were regular contributed various creatures of difference based on sex. They went to school, were studyng of the basic of reading books,writing ofliteracy At last,they were oppotunities in spread of the ways of course high grades school.(3) The unite of "Readers communities" were changed of their creatures gradually." moreover, everyone of readers were known of communities of the using of shorted words of "YOUBU","SHOUBU".

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：近代　読者共同体　少年雑誌　われわれ　子ども文化　教育史　児童　心性

１．研究開始当初の背景

本研究は、「近代日本における児童教育雑誌の成立と読者共同体の成立過程に関する研究」（平成 20 年～21 年度科学研究費補助金【若手研究 B】、課題番号：20730519、研究代表者：田中卓也）の続編として位置づけ、研究を進めることになった。「児童」・「少年」の概念の違いの不明確な点、またそれぞれの読者意識の形成過程と読者共同体の形成の特徴などについても明らかにできないことを理由に、本研究を着想し、進めることとなった。

２．研究の目的

本研究課題「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」は、近代日本における児童雑誌における読者の組織化と読者共同体の成立の実態に関する史的研究の一端をなすものである。

平成 23 年度から 25 年度までの 3 年間にわたり、以下の 3 点の事項について、明らかにする。

①明治期から昭和戦前期までに発刊された少年雑誌を現存されているものすべてについて考察し、その特徴を明らかにする。なかでも少年らに人気のあった少年雑誌（『少年世界』、『少年界』など）を取り上げ、各雑誌の特徴についても明らかにする。

②明治期から昭和戦前期における「少年読者」の年齢層およびその特徴を明らかにする。なぜその雑誌を読むことになったのかについての動機・理由などについても、可能な限り迫ってみようと考えている。

③想像上の「読者共同体」の形成過程を分析・考察し、その特徴について明らかにする。

３．研究の方法

本研究では、現存している数多くの少年雑誌の読者投稿欄を中心に、投稿記事内容について分析・考察を試みた。投稿記事の分析は、当時の投稿者の思いや真（心）情が込められていることが多分に存在し、心性を理解しながら解読することが求められるし、時にオーバーな表現などもあるため、解釈は難航を極めることもある。しかしながら彼らの声は＜生＞のものであって、「生きた資料」になるため、貴重な資料である。近代少年における奥底に秘められた心性を浮かび上がらせることこそが、この研究の本質（心髄）であることをさきにことわっておきたい。

①基本的文献の整備

近代少年雑誌およびそれに関する文献を整備するため、設備備品費などを使用して『日本児童文学大事典』、『児童文学事典』、『少年倶楽部・少年クラブ』総目次（上）・（中）・（下）巻などの関連図書を購入した。

②資料の悉皆収集と整備

近代少年雑誌の資料を悉皆収集すること、またその整理が必要となるため、国内旅費を使用して大阪府東大阪市に所在する大阪府立中央図書館国際児童文学館に赴き、さらに消耗品費を使用して、『少年倶楽部』、『少年園』、『少年世界』、『少年界』等の閲覧、複写などを行い整理した。資料の欠号(欠損)を補うために他の機関にもくまなく訪問した。東京に所在する国立国会図書館、日本近代文学館などにも文献調査を行うことがあった。集中的に閲覧利用させていただく配慮から、当館長および職員の方々に謝金等を支払った。

③近代少年雑誌に関する内容および特徴の考察

近代少年雑誌に関する内容および特徴を分析・考察するには、前田愛『近代読者の成立』や、川村邦光『オトメの祈り－近代女性イメージの誕生－』、成田龍一「『少年世界』と読書する少年たち－一九〇〇年前後、都市空間の中の共同性と差異－」（『思想』第 854 号、岩波書店、所収）、岡谷英明「『幼年雑誌』にみる読者共同体の教育史的意義」（『日本の教育史学』第 36 集所収）などのこれまでの蓄積のある先行研究についてまとめ、主に明治期に発刊された雑誌の特徴や読者共同体の意義についてふれる。また大正期以降については、随時行った。

４．研究成果

「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」では、平成 23 年度から 25 年度までの 3 年間の研究により、以下の 3 点の事項について、明らかにする。

①明治期から昭和戦前期までに発刊された少年雑誌を現存されているものすべてについて考察し、その特徴を明らかにする。なかでも少年らに人気のあった少年雑誌（『少年世界』、『少年界』など）を取り上げ、各雑誌の特徴についても明らかにする。

②明治～昭和戦前期における「少年読者」の年齢層およびその特徴を明らかにする。なぜその雑誌を読むことになったのかについての動機・理由などについても、可能な限り迫ってみようと考えている。

③想像上の「読者共同体」の形成過程を考査し、その特徴について明らかにする。

上記の課題について、平成 23 年度、24 年度、25 年度の研究計画に基づき、考察・検討を試みた。このことから以下のことについて明らかにすることができたと考えている。

第一点として、少年雑誌は、児童雑誌の誕生のなかで登場し、「児童」とは異なり、「少年」という枠組みを形成したことである。わが国では、1888（明治 21）年の『少年園』の発刊を皮切りに、『少年世界』（博文館、1894 年）、『少年界』（金港堂、1904 年）、『荘倶楽部』（大日本雄弁会講談社、1914 年）と相次いで市場に登場し、子どもらに愛読されることになった。これらの雑誌は、それまでに出されていた「児童雑誌」とは区別され、「少年」という新たな概念が形成されたことに起

因する。このときの「少年」はおよそ、小学校低学年から高等学校生ごろまでをさすものであることもわかってきた。
「明治期児童雑誌『少年子』・『少年之友』における文章指導と読者に関する研究」では、すでに 1888 年（明治 21）年刊行の『少年子』および『少年之友』の両誌ともに、「少年」の言葉を使用している。少し時代が下るが、「明治期児童雑誌『学友』に関する研究－三重学友社『学友』誌を中心に－」では、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて作成された地方誌であり、誌面上では「児童」という言葉が使用されている。「少年」という概念は、児童から分化して登場するはずであったが、「少年」という枠組みを形成したにもかかわらず、わが国では、「児童」と「少年」が混同されたまま使用されていた事情が見て取れる。

また大正期に発刊された世界少年社刊行の『世界少年』では、誌面には「少年」の文字が躍るように掲載されていて、「児童」という表記は目に付かないものとなっている。大正期から昭和戦前期にかけては、「少年」という概念が明確に打ち出され、少年は小学校高学年から、中学生、実業学校生、高等学校生をさすもの、一方「児童」についてはおもに幼少期から小学校低学年の頃の子どもを対象としていた。「児童雑誌『幼年ブック』の子ども読者に関する一考察」、「戦後における幼年雑誌の誌面構成と読者の様相」、「戦後における『幼年クラブ』の光と影－復刊、廃刊と読者の関心をめぐって－」からは、児童と類似した「幼年」という言葉を雑誌のタイトルに掲げ、少年と区別を図るものとして普及していった。これは実業之日本社刊行の『幼年の友』（1909 年）先述の大日本雄弁会講談社刊行の『幼年倶楽部』（1911 年）が早い時期から使用していたことは、前回の執筆者が研究代表者を務めた 2008（平成 20）年～2009（平成 21）年の 2 年間にかけて実施した科研費研究「近代日本における児童雑誌の成立と読者共同体の成立過程に関する研究」（若手研究 B　課題番号：20730519）の報告書のなかで明らかにしている。「少年」という概念に対して「幼年」という言葉が登場してきていることが伺える。第二次世界大戦後になってからも「少年」、「幼年」の区別のもと多くの雑誌は刊行されていくことになった。

第二点は、少年雑誌における誌面上の想像上の「読者共同体」が存在していたことである。小学校を中心にして雑誌を購読する読者は増加した。このことはわが国の教育制度の確立された「学制」からはじまる近代学校教育制度の発展と関連づけられるものであった。彼らは学校教育を受け、読み書きを基礎に学習経験を積むことになり、家計事情が良好で、成績優秀であれば、中学校、高等学校への進学の道が広がった。しかしながら家計が苦境であると、進学の道は絶たれることとなり、高等小学校あるいは実業学校、実業補習学校への進路選択が待ち受けていた。しかしながらいずれの進路に進んでも、「字を読む」ことは求められたのであり、大正期移以降に爆発的人気を誇った『少年世界』、『少年倶楽部』などは児童生徒が学校に持参し、回し読みをしながら、読者を増やしたり、さらには学校図書館を創設し、クラス（級）で級長、購読者の代表、ときには担任教師の場合も存在したが、毎号揃えたりしながら（バックナンバーの収集・管理）、どんな児童生徒にも目のふれることのできるような状況となっていった。また読者等は、雑誌に関心を持つなかで、（愛読者）仲間を発見したり、詩や短歌、俳句などを学習し、学習した腕前を披露するべく、多くの少年雑誌に見られた「投稿欄」にこぞって寄稿したのである。投稿し選ばれると、「入賞」という名誉とメダルを賜うことができ、栄誉を誇ることができたのである。ときに投稿欄は、当選者以上に当選しなかった者などがあふれ、炎上する事もしばしば存在した。この過熱ぶりは、ときに雑誌編集者の目にも止まるようになり、注意を勧告するが、なかなか聞き入れることが困難な場合が多く、脅しをかける者や他人の作品を無断で盗作する者（剽窃行為者）も登場し、混乱を来すこともしばしばであった。文学的教養を向上させるための投稿欄も多くの少年雑誌では、剽窃行為の横行が目立つことになった。

しかしながら読者らは投稿欄を通じて、仲間を求め、誌面上の交際を図る者も顕著となった。彼等は時には文芸作品を投稿するなかで、切磋琢磨しライバルとして存在を確立した者、また「◎◎◎会」等を結成し、メンバーの一員として活動をともにする者などが見られるようになった。「愛読者」同士が互いに、誌面を通じて交流を図る、いわゆる「読者共同体」が形成されていたのである。このことは戦前期までの少年雑誌に見られるだけではなく、戦後のそれにも見られたのである。戦前のときには、「国家主義的」な思想を通じてメルクマールとし、共同体を形成する事例（たとえば『学友』、『少年世界』、『少年界』、『少年倶楽部』、『世界少年』など）もあれば、編集側に対するあいさつ、日記的な報告を送付した事例（たとえば、『幼年の友』、『小学男生』など）も存在した。また大正自由教育を先導した雑誌『赤い鳥』、『金の船』（のちに『金の星』に改称）、『おとぎの世界』などにおいても、読者共同体は形成されており、そこでは「純粋な子ども」であり続けたい、と願う児童、少年らが“永遠の幼さ（幼児性）”を武装しながら愛読者して共同体を維持していたことも明らかになった（「『おとぎの世界』における誌面構成と読者の様相」）。しかしながら「子ども中心」の思想を掲げた、大正自由教育運動は長くは続かず、わが国が国家主義にいささか傾倒していく中で、先の雑誌なども、昭和初期頃までにかけて、誌面

方針の転換や廃刊の憂き目に合うこととなり、「児童中心主義運動」の衰退にますます拍車をかけることとなった。

第三点は、読者共同体の特徴の変化があらわれたことである、目には見えない読者の共同体は、戦後になるとさまざまな形に変貌していくこととなる。戦前に発刊された雑誌で戦後復刊を遂げた『幼年クラブ』（講談社）、『小学一年生』、『小学六年生』（小学館）は読者投稿欄を設定し続けたが、読者等は「幼ク」、「小一」、「小六」と略語にしてとりあつかい、誌面上で言葉を交換した。このことで共同体のメルクマールに発展することになった。しかしながら戦前期までの少年雑誌に見られるような、思想に裏打ちされたものではなかった。むしろ誰もが気軽に呼びやすい、覚えやすい略語にて表現することで、読者等をまとめようとしたのである。このことはアメリカの影響を受けた、戦後の男女平等、個人主義的、多趣味的な風潮とも関連しているものと考えられる。集英社の発刊した『少年ブック』、『少女ブック』は、まさしくこのことを先取りしたかたちで登場し、誌面内容に新たにマンガをはじめ、ファッション、スター（アイドル）関連記事、テレビ関連記事を多く含んだ総合雑誌として登場することになった（「『少女ブック』における娯楽性と教養」）。

かくして『幼年クラブ』、『少年クラブ』、『少年ブック』などがその役割を終え、相次いで、廃刊となっていくなかで、マンガ雑誌が台頭した戦後期には『少年マガジン』（『少年ブック』の後継雑誌、講談社）、『少年サンデー』（小学館）が発売され、マンガ雑誌の流行の兆しが見えるようになっていくのである（「『少年マガジン』における読者の研究－創設当初（1959 年～1962 年）における誌面内容の構成とマガジン愛読者の関心に注目して－」）。少年マガジン誌においても発売当初は、投稿欄も設定され、読者の意見交換などがなされていたが、1962 年以降になるとほぼマンガ一色の構成となり、投稿欄が消滅していくことになった。すなわち読者らの「心の小座敷」は誌面外へと追いやられることになったのである。教養習得の部分についても、新たなユーモア、ギャグのコーナーに生まれ変わることになっていったのである。

老舗書店のひとつであった小学館の学年別学習雑誌は、売り上げ好調であり、多くの親や子どもの読者を獲得していった。また講談社は小学館に対抗して 1950 年代後半より、『たのしい幼稚園』、『たのしい一年生』などを相次いで発刊し、同社を追随していくことになった。しかしながら母親を対象とした読者を獲得できたものの、子ども読者をこれまで通りに獲得することが困難となった。また投稿欄への寄稿についても、育児相談やそれに関連するものが主流を占めるようなり、読者同士の交流というよりもむしろ、編集者サイド（出版社）と投稿者とのやりとりに執着していくことになった。『小学一年生』から『小学六年生』といった学年別学習雑誌においては、たとえば「六ちゃん」（『小学六年生』の場合）などのキャラクターを投稿欄上に登場させ、読者とのやりとり交流を図らせる工夫などを取ることになった。「小六」という共同体とは別に、「六ちゃん」と読者との絆を形作ったのであり、投稿欄は引き続き継続していくことになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

① 田中卓也、近代少女雑誌『少女界』に関する研究－投書欄「女子談話会」の投書を中心に－、越谷保育専門学校研究紀要第 2 号、2014 年、査読無、10～17

② 田中卓也、戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の様相、共栄大学研究論集第 11 号、2014 年、査読無、1－11

③ 田中卓也、『実業少年』が求めた読者像、関西教育学会年報通巻第 37 号、2012 年、査読無、54～58

④ 田中卓也、近代少年雑誌における読者の共同体形成に関する一考察－『少年界』・『少年世界』の子ども読者の比較を通して－」、関西教育学会年報通巻第 36 巻、2011 年、査読無、136～140

〔学会発表〕（計 24 件）

① 田中卓也、集英社雑誌『少女ブック』・『明星』における読者像、日本保育学会第 67 回大会ポスター発表、2014 年 5 月 17 日、大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学

② 田中卓也、近代児童雑誌『学友』に関する研究、日本乳幼児教育学会第 23 回大会、口頭発表、2013 年 11 月 24 日、千葉大学

③ 田中卓也、近代児童雑誌の読者に関する研究－『世界少年』の読者の世界観を中心に－、関西教育学会第 65 回大会、2013 年 11 月 16 日、和歌山大学

④ 田中卓也、児童雑誌『おとぎの世界』における誌面構成と読者の様相、日本子ども学会第 10 回子ども学会議ポスター発表、2013 年 10 月 12 日～13 日、岡山県立大学

⑤ 田中卓也、明治期児童雑誌『少年子』・『少年之友』における文章指導と読者に関する研究、日本教師教育学会第 23 回研究大会ポスター発表、2013 年 9 月 16 日～17 日、仏教大学紫野キャンパス

⑥ 田中卓也、『おもしろブック』が求めた読者像とその背景、日本子ども社会学会第 20 回大会、2013 年 6 月 29 日、関西学院大学上ヶ原キャンパス

⑦ 田中卓也、『少女ブック』における読者の娯楽性と教養、日本保育学会第 66 回大会

ポスター発表、2013 年 5 月 11 日、中村学園大学・中村学園短期大学

⑧ 田中卓也、学年別学習雑誌『小学六年生』における誌面構成と読者の様相、日本乳幼児教育学会第 22 回大会、2012 年 12 月 8 日、武庫川女子大学

⑨ 田中卓也、戦後における講談社刊行雑誌『たのしい一年生』の読者に関する研究、中国四国教育学会第 64 回大会、2012 年 11 月 11 日、山口大学

⑩ 田中卓也、戦後における『少年倶楽部』の誌面構成と読者の位相、日本児童文学学会第 51 回研究大会、2012 年 10 月 30 日、千葉大学西千葉キャンパス

⑪ 田中卓也、『たのしい幼稚園』における誌面構成と読者の様相、日本子ども学会第 9 回子ども学会議ポスター発表、2012 年 10 月 2 日、東京市ヶ谷 JST 本社ビル

⑫ 田中卓也、集英社刊行児童雑誌『少女ブック』の誌面構成と読者の様相、日本幼児教育学会第 20 回大会、2012 年 9 月 27 日、駒沢女子大学・駒沢女子短期大学

⑬ 田中卓也、戦後における児童雑誌の光と影－大日本雄弁会講談社刊『幼年クラブ』を中心に－、平成 24 年度日本児童文学学会中部支部例会秋季例会、2012 年 9 月 26 日、中京大学名古屋キャンパス 0 号館 6 F 会議室

⑭ 田中卓也、近代少年雑誌における文章指導と投書（観）、日本教師教育学会第 22 回大会、2012 年 9 月 15 日～16 日、東洋大学白山キャンパス

⑮ 田中卓也、戦後における幼年雑誌の誌面構成と読者の様相－大日本雄弁会講談社刊行『幼年クラブ』を中心に－、全国保育士養成協議会主催全国保育士養成セミナー第 51 回研究大会、2012 年 9 月 7 日、京都文教大学・京都文教大学短期大学部

⑯ 田中卓也、小学館刊行学年別学習雑誌『小学一年生』の普及と読者の様相」日本子ども社会学会第 19 回大会、2012 年 6 月 27 日、國學院大學たまプラーザキャンパス

⑰ 田中卓也、小学館刊行児童雑誌『小学六年生』における読者の研究、日本乳幼児教育学会第 21 回大会、2011 年 11 月 23 日、東京成徳大学・東京成徳短期大学

⑱ 田中卓也、『日本少年』/『少女の友』/『幼年の友』にみる読者の性格－実業之日本社の思惑を中心に－、中国四国教育学会第 63 回大会、2011 年 11 月 16 日、広島大学

⑲ 田中卓也、『実業少年』が求めた読者像、関西教育学会第 63 回大会、2011 年 11 月 3 日、近大姫路大学

⑳ 田中卓也、『少年マガジン』における読者の研究－創刊当初の誌面構成とマガジン愛読者の関心に着目して－、日本児童文学学会第 50 回大会、2011 年 10 月 27 日、東京都市大学等々力キャンパス

21 田中卓也、戦後に発刊された児童雑誌における読者に関する研究－『少国民世界』を中心に－、日本子ども学会第 8 回子ども学会議ポスター発表、2011 年 9 月 23 日、武庫川女子大学西宮キャンパス

22 田中卓也、児童雑誌『少年ブック』における読者の研究－前身雑誌『おもしろブック』の創刊と同誌愛読者の特徴を中心に－、日本幼児教育学会第 19 回大会、2011 年 9 月 16 日、敬愛大学

23 田中卓也、金港堂刊行雑誌『少年界』・『少女界』における表紙の変遷と読者の性格、日本児童文学学会第 73 回中部例会、2011 年 9 月 9 日、名古屋市東図書館

24 田中卓也、『少年ブック』における読者意識に関する研究、日本保育学会第 64 回大会ポスター発表、2011 年 5 月 23 日、玉川大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者

田中　卓也（TANAKA，Takuya）
共栄大学・教育学部・准教授
研究者番号：90435040

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：